



# タコツボで日本一!

プラスチック製品製造業 株式会社サンポリ

(山口県防府市新築地町)

鹿嶋 英一郎 社長

海底の岩場に潜むタコは、潮の流れがゆるやかになると、イシガニや小魚、貝などを捕獲します。潮が変わり、すみかに戻ろうとする際、隠れる場所があれば、入ってきます。この習性を利用したのがタコツボ漁で、兵庫県・明石が発祥の地といわれています。かつては素焼きの陶器が主流でしたが、近年は割れにくいプラス



会社を一躍有名にしたヒット商品「タコツボ」を持つ鹿嶋英一郎社長。「これが当社のビジネスモデルの原点です」

チック製が一般的になっています。このプラスチック製のタコツボの製造、販売で、全国的に有名な会社サンポリです。国内シェアは何と7割。タコツボ日本一企業として、メディアにもたびたび紹介されています。サンポリは1972年に設立されました。当初の社名は山陽ポリ総業。鹿嶋英一郎社長の父親であ



タコツボはタコの生息域や種類によって仕様を変えるため、多くのラインナップを揃える。

る鹿嶋博文会長が、梱包などに使われた後、大半は廃棄処分されていた廃プラスチックに着目し、さまざまなリサイクル製品の開発を始めた。その一つがタコツボだったのです。当時、主流だった素焼きのタコツボには、大きな欠点がありました。タコが嫌うフジツボがすぐに付着してしまい、漁師は定期的に取り除くのが面倒な上、舟での移動中や海流の荒れにより割れることが多かったのです。この悩みを聞いた博文会長は、プラスチックの試作品を持ち込みましたが、伝統的な漁法を変えることに抵抗があったため、門前払いが続きました。博文会長はあきらめず、タコの生態を調べ、タコの好む色や形、肌触りを徹底的に研究。心血注



廃プラスチックを再生利用し、新たな商品へ蘇らせる。数多くの金型を揃え、多様な商品開発を行っている。

で作ったタコツボを無料で漁師さんに配り、「タコが取れたら、代金を払ってほしい」と頼み込みました。この捨て身の提案が、漁師の気持ちに通じたのです。陶器と変わらずタコが取れると評判となつて、次第に注文が入るようになり、一時は3か月待ちのヒット商品となったのです。

英一郎社長は「研究や売り込みに苦心した話を、それこそ『耳にタコ』ができるほど聞きましたね。父は『タコと話ができるようになった』とまで言っていました」と教えてくれました。

サンポリのタコツボはカマボコ型。陶器製よりも割れにくい上に、底が平らで、海底でも転がりにくいと言います。試行錯誤を重ねた結果、タコツボの色は、現在の赤茶



色になりました。投入する海によつて、タコの大きさや種類も違うことから、タコツボの形や大きさも生息域や海流を考え、仕様を変えているそうです。ちなみに「タコの好む肌触りは企業秘密」（英一郎社長）となっています。

タコツボは、問題点をキャッチし、試行錯誤の上、解決策を開発するサンポリの原点なのかもしれません。

現在の社名になったのは1991年です。創業以来、環境に配慮した「循環型社会」を目指すサンポリが、次に目を向けているのが農業です。

農林水産省によると、農業就業人口は192万人（2016年）。20年間で半減し、平均年齢も66歳を超えています。高齢化に伴い、作業環境の改善、省力化が課



写真左：次世代のユースは「農業分野」。「らくラック」はイチゴ農家の生産性を飛躍的に向上させる。写真右：「らくラック」の開発で平成28年度山口県産業技術振興奨励賞山口県知事賞を受賞。

題となっていることを踏まえ、行政などのアドバイスも受けながら、組み立てやすいプラスチック製の部材を開発しています。商品名は「らくラック」で、支柱や棚を自由に組み合わせることで、培地を作業しやすい高さに調節できるのです。さまざまな作物のなかでも、座つての作業が多いイチゴ栽培での活用が期待されています。また、栽培棚を固定式から水平移動式にすることにより、作業用通路を1か所に集約することが



## Company profile

株式会社サンポリ

【創業】昭和47年

【住所】山口県防府市新築地町6-1

【ホームページ】<http://www.sunpoly.jp>



株式会社サンポリ代表取締役の鹿嶋氏と山口銀行三田尻支店の戎谷知之支店長。「変革を志向する経営方針、ゴルフの腕前は上級者等々、鹿嶋社長は私が目指す経営者像です」

でき、イチゴの栽培面積が1.8倍になるという特長もあります。

英一郎社長は「タコツボのように、農家の使い心地を聞きながら、作業の負担が軽くなるようにバージョンアップを続けていきます。農業は無限の可能性がありま

す」と説明しています。